

# ～輝きの子育て～

## Out Of sight, Out Of mind ～見えなくなれば、忘れられる～

終活の一環として、書籍、CD、DVD、アルバム等を整理、廃却した時、何となく捨てがたいアルバムを残していました。一カ月程前になるが、ふと昔のアルバムを手にとって眺めていると、写真とそのコメントから当時のことがまざまざと思い出され、家族との会話の種になりました。昔は、出産祝いにアルバムを贈るのが一般的でしたが、最近はどうだろとボンヤリと考えていました。

そんな折に、藤原正彦氏の「国家と教養」の中の一文が我が意を得たものでしたので、この本の主題ではありませんが、引用させて貰います。

「私達は、どうしたのか、ここ数十年、撮った写真を見るのが少なくなりました。デジタル・カメラのせいだと思います。ケータイなどについてデジタル・カメラだとフィルム代は掛りませんから、撮られた写真の枚数は、かつての何倍にもなっています。私も先日、ベルギー、オランダをレンタカーで一週間旅しただけで百数十枚は撮りました。それら写真はそのままパソコンにしまっており、友達に写真を送るのもパソコンからパソコンでできますから、プリントすることは減多なくなりました。面倒なアルバムを一切作らなくてよくなったのですから便利な世の中になったものです。

ところが、それらを後になって見ることがめっきり少なくなりました。どこで、どんな写真を撮ったのか、パソコンにしまったのかさえ忘れてしまうのです。一方、アルバムが本棚にあれば、ふと懐かしくなって手に取ったりします。家族でそれを見ながら、家族の会話がはずみます。

一方、パソコンにしまっている大量の写真は、ひょいと手を伸ばすということになりません。機械の中の写真はアルバムの中のものに比べ、はるかに遠い存在となります。

同様のことは、活字本と電子本についても言えます。

すでに読んだ活字本が本棚に並んでいれば、ふと目にした時に、懐かしくて手にとって見たりします。再度、目を通す必要に迫られた時は、本の形や色、出版社などを大体覚えていますから、すぐ見つけられます。本を開けば、昔引いた傍線や書き込みが大いに役立ちます。

一方、電子本では、廊下を歩いたり、和室で、ぼんやり畳に寝転んでいる時に、目に触れることはありません。電子本には、形や色がないからおめあての本を探すのが一苦労です。うまく探し出してページを開いても、感情のこもった傍線や書き込みもなく、どこが重要で、どこが、くだらないのかよくわかりません。

機械の中の本は時間がたつにつれて、未だ読んでいない本と、さして違わないものになります。機械の中の本は本棚の本に比べ、はるかに遠い存在になるのです。

英語に「Out of sight, out of mind」という諺があります。「去るものは、日々に疎し」と意識されていますが、直訳すれば、「見えなくなれば、忘れられる」ということです。

機械の中の写真と同様、機械の中の本は、内容もろとも忘れられてしまうのです。」

長い引用でしたが、その通りだと思います。アルバム作りは面倒ですが、よい写真は機械の中から出してあげましょう。

約30年後、令和32年(2050年)には、65歳以上が総人口の4割を占め、100歳以上も50万人を超える見込みとなっています。写真を機械の中から外に出しておくことは老後の楽しみにもなるでしょう。